

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520383

研究課題名（和文） 古代日本語における連体形の機能とその変遷

研究課題名（英文） A Functional and Historical Study of the Attributive Form of Verbs and Adjectives in Old Japanese

研究代表者

大木 一夫 (OKI KAZUO)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00250647

研究成果の概要（和文）：

本研究は、古代語の活用体系・連体形の機能の分析をおこない、古代語の連体形がいかなる文法形式であったのかを明らかにするものである。平安時代における連体形の基本的機能は、連体修飾機能と準体句形成機能である。係り結びは、現代語のスコープの「のだ」とほぼ同等の機能をもつと考えられ、係り結びの連体形も準体句を形成するものである。また擬喚述法の連体形も準体句と考えられる。連体形は、平安時代以降変遷するが、この準体句形成機能が退化し、それにより連体形終止の一般化と、係り結びの衰退が引き起こされたのだと考える。

研究成果の概要（英文）：

The following research aims to reveal the grammatical characteristics of the attributive form of verbs and adjectives in Old Japanese by conducting an analysis of the functions of both the conjugational system itself and the attributive form in Old Japanese. In Heian Era Japanese, the main function of the attributive form is to modify a noun or to create a quasi-nominal phrase. The *kakarimusubi* prevalent in Old Japanese is almost identical in function to “*noda*” (a common copula found in Modern Japanese expressing scope) in the sense that the attributive form found in the *kakarimusubi* forms a quasi-nominal phrase. In addition, the *gikanjutsuhō* (pseudo-exclamatory function) expressed by the attributive form can also be said to form a quasi-nominal phrase. As the attributive form loses its function to form quasi-nominal phrases after the Heian Era, the attributive form becomes analogous with the terminal form and the *kakarimusubi* fades out of usage.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史、文法史、活用、係り結び

1. 研究開始当初の背景

古代日本語が近代日本語に移り変わるその過程において、活用形としての連体形は大きく変化することはよく知られている。具体的には、連体形終止の増加（終止形・連体形の統合）、連体形で結ぶ係り結びの消滅、連体形準体句の消滅などである。これらの現象は日本語史上きわめて重要な変化であり、これまで数多くの研究がなされてきた。しかし、このような現象がなぜ起こったのかということの考察は必ずしも十分ではないように思われる。例外的に、係り結びの消滅の理由として、連体形終止の増加が係り結びの連体形の表現性を目立たなくしたため、その役割を果たせなくなり消滅したといわれることがあるが、このようなとらえ方は疑問も多い。連体形に関わるこのような変化がなぜ起こったのかということを考えていくことは、むずかしい問題ではあるが、日本語史研究の方向性として重要不可欠である。

このような係り結びの消滅、終止形・連体形の統合、連体形準体句の消滅という現象がなぜ起こったのかという点を考えていくためには、古代語の連体形という活用形がいかなる機能をもっているかを明確にした上で、その機能がどのように変化したのかということ进行分析することが必要になると思われる。このような研究の方向性に関しては、大木一夫「動詞の連体形」『国語学研究』43において、平安時代の連体形機能の基本的な枠組みについて整理した際、終止形・連体形の統合の原因を考えるためには、連体形の機能の変遷、とくに活用形としての機能弱化という視点からとらえるべきだという帰結を得た。また、一般的にいっても、上記のような現象はいずれも連体形におこったことであるから、活用形そのものがもっている機能と無縁ではないと考えられる。

つまり、この連体形の機能という視点から、古代語の連体形がいかなる文法形式であったのか、またそれがいかに変化したのかという点を明らかにすることによって、上述のような連体形に関わる変化の要因が分析可能になると思われるのである。

古代語の連体形がいかなる形式であるのかという点では、これまで連体形の起源・連体形の機能・連体形の変遷といった側面からの検討がおこなわれてきたが、連体形の機能の変遷という視点からの詳細な検討はあまり行われてこなかった。連体形の起源の研究としては、例えば大野晋・阪倉篤義・川端善明・山口佳紀などの研究があり、これらの研

究はきわめて興味深いものであるが、その視点は基本的に活用形の成立そのものに向けられている。また、連体形の機能の研究には山口佳紀・秋本守英・近藤泰弘などの研究があるが、山口・秋本の論は古代語の全活用形機能の概要把握を指向するものである。近藤の論は古代語の準体句の性質を精緻に記述したものであるが、構造の側面を重視したものである。また、連体形の変遷の研究としては、例えば小池清治・山内洋一郎・山口堯二などの研究があげられる。小池・山内は連体形終止がいかなる箇所にあられるかという点を細かく検討しているが、連体形の機能とのかかわりは十分ではない。山口堯二の論は準体句の問題に限られる。

また、連体形に関わる現象として、係り結びの連体形については、大野晋の倒置を起源とする説、阪倉篤義・野村剛史の研究によって喚体句（擬喚述法）を起源とする説が唱えられてきたが、倒置説には疑問が出されており、喚体句説も係り結びの表現性からみて起源説としては問題があると思われる（大木一夫「動詞の連体形」『国語学研究』43）。連体形準体句には信太知子の一連の研究があるが、構造の分析が主であって、機能・変遷という方向性の研究ではない。

このようにきわめて多くの研究がなされており、それらの価値はゆるがないものの、活用形の機能を細かく分析し、それを文法現象の変遷に結びつけていこうとする研究は十分になされていないと考えられる。

2. 研究の目的

本研究においては、古代語における連体形の機能の分析をあらためておこなうことによって、古代語の連体形がいかなる文法形式であったのかという点を明らかにしたい。また、係り結び・連体形準体句における連体形の機能についても検討する。その上で、連体形の機能と上述のような連体形に関わる言語変化現象の要因を考えていきたい。

本研究においては、まずは、

- (1) 古代語とくに平安時代語の活用体系を整理し、その上で連体形の機能を明らかにする。

その成果をもとに、

- (2) 係り結びの連体形は、係り結びのいかなる機能のために連体形であるのかということを明らかにする。

先行研究の考え方の不十分な点を明らか

にしつつ、(1)で分析した連体形の機能から、なぜ係り結びの結びが連体形になるのかということ明らかにする。係り結びは焦点（フォーカス）に関わるものであるという研究動向を受け、現代日本語において焦点形成に関わるとされる「のだ文」の一部（いわゆるフォーカスの「のだ」）との対照もおこなうことによって、係り結びの機能と結びの連体形の機能との関わりを解明していく。

さらに(1)の成果をもとに、

(3) 連体形による擬換述法の機能について明らかにする。

いわゆる擬換述法も連体形をもつ形式として知られている。この擬換述法がいかなる機能を持ち、連体形がいかなる関わりかたをしているのかを明らかにする。ここでは、文の機能という視点を取り入れて考えることにしたい。

以上をふまえ、

(4) 連体形の機能変遷の方向性を明らかにし、連体形で結ぶ係り結びの消滅、終止形・連体形の統合、連体形準体句の消滅の原因について考察する。

3. 研究の方法

本研究は、まずは、平安時代について連体形の用例データを収集しながら、平安時代の連体形の基本的な機能を把握する。それをもとに、係り結びにおける連体形が、連体形のもついかなる機能を果たしているのかということ明らかにする。次に、擬換述法の連体形がいかなる機能を果たしているのかを明らかにする。その上で、平安時代前後の連体形の実態を把握しつつ、連体形機能の変遷とその日本語史上の位置付けを検討する。

(1) 平安時代語の活用体系の整理および連体形の機能の分析

平安時代の文学作品の電子化本文を利用して、用例の収集にあたる。そのデータをもとに、活用体系を整理し連体形の機能を分析・整理する。

(2) 係り結びにおける連体形の機能の分析

これまでの係り結び研究における連体形の扱いについての問題点、係り結びの機能の問題点を明確にした上で、上記(1)のデータをもとに、係り結びの連体形に関して、その機能を明らかにする。その際には、係り結びがいかなる機能を果たしているのかということとの関わりから、その機能を分析し、なぜ係り結びの結びが連体形となるのかという点について考察する。

(3) 現代日本語の「のだ文」との対照

現代日本語において、係り結び文と同様の焦点表示機能をもつ文として、いわゆるスコ

ープの「のだ文」がある。この「のだ文」の用例を収集し、焦点表示機能をもつ「のだ文」の構造とその機能を明らかにし、係り結び文と対照する。この際、とくに、係り結び文の連体形と、「のだ文」における準体マーカ―としての「の」の機能に着目して分析を進める。

(4) 擬換述法における連体形の分析

上記(1)のデータをもとに、擬換述法を形成するものを取りあげ、連体形がいかなる機能を持つかを分析する。

(5) 連体形機能の変遷の分析

古代語における活用体系全体のあり方を検討しながら、平安時代以前の連体形の実態、および院政鎌倉期以降の連体形の実態を把握した上で、古代日本語における連体形機能の変遷を明らかにし、近代日本語への変遷の方向性を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 古代語の活用体系

連体形の機能とその変遷を検討するために、分析の手続きを明確に示しながら、古代語（平安時代語）の活用について整理した。活用体系は次のように整理される。

(a) 動詞の活用（動詞語幹と屈折接辞）

	正格活用		
	RA	RE	RI
	思ふ	出づ	過ぐ
語幹	omof-	idu-	sug-
存在	u ₁	u ₁	u ₁
連体	u ₂	uru	uru
条件	e ₁	ure	ure
命令	e ₂	eyo	iyō
成立	i ₁	e ₃	i ₁
未実現	a	e ₄	i ₂
	四段	下二段	上二段

変格活用				
IV	IN	IR	IK	IS
見る	死ぬ	有り	来	為
mi-	sin-	ar-	k-	s-
ru	u ₁	i ₃	u ₁	u ₁
ru	uru	u ₂	uru	uru
re	ure	e ₁	ure	ure
yo	e ₂	e ₂	oyo	eyo
φ	i ₁	i ₁	i ₁	i ₁
φ	a	a	o	e ₄
一段	ナ変	ラ変	カ変	サ変

(b) 屈折を伴う派生接辞

-ar-u (る)、irar-u/ -erar-u (らる)、-as-u (す)、
-esas-u/ -isas-u (さす)、-asim-/ -esim-/ -isim-
(しむ)、-itar-i/ -etar-i (たり)、-er-i (り)

(c) 屈折をともなう附属語 (助動詞)

=m-u (む)、=ma-si (まし)、=t-u (つ)、=n-u
(ぬ)、=ker-i (けり)、=kem-u (けむ)、=mazi-
(まじ)、=nar-i(1) (なり (推定))、=mer-i
(めり) =ram-u (らむ)、=be-si (べし)、
=nar-i(2) (なり (断定))、=goto-si (ごとし)

(d) 屈折を伴わない附属語 (助詞)

=zi (じ)、=de (で)、=te (て)、=nagara (な
がら)、=tomo (とも)、=monokara、=momowo
(ものを)、=ba (ば)、=do (ど)、=domo
(ども) =kasi (かし)、=kana (かな)、=yo
(よ)、=na (な (非禁止))、=mogana (も
がな)、=monono (ものの)、=monoyuwe (も
のゆゑ)、=namu (なむ)、=baya (ばや)、
=sigana (しがな)、=na (な (禁止))、=so
(そ)、=tutu (つつ)

(2) 古代語連体形の機能

① 連体修飾句形成機能と準体句形成機能

古代語連体形の機能は、連体修飾句形成機能および準体句形成機能の二つである。従来から連体形は連体修飾をおこない、準体句を形成するということが知られてきたが、係り結びの連体形、擬換述法の連体形はこれらと別に考えられることが多かった。しかし、両者はいずれも連体形の準体句形成機能によって形成された句であるということをも明らかにした。したがって、古代語連体形の機能は、連体修飾句形成機能および準体句形成機能の二つであると考えられる。

② 擬換述法の連体形

擬換述法は連体形によって感嘆的な表現を形成するものと考えられることが多かったが、実は感嘆的な表現を形成することに大きく関わるのは、文の機能であると考えられる。たとえば、現代語の「あっ。UFO!」「ゆっ幽霊!」という一語文は、「UFO」「幽霊」という名詞の機能によって感嘆的な文をなしているのではなく、認識文という文がもつ「事態をあらたに認識・判断する」という機能によるもので、さらに、そこに事前の認識との大きな隔たり(存在を認めていなかったのに認識した)があつて、それらによって感嘆的な意味が生み出されたものと考えられる。このように考えると、古代語の連体形終止の文である次のような文、すなわち、

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく
花の散るらむ (古今集・巻一・春下)

も、認識文であつて、「花が散っているのは、落ちついた心もないからのようだ」という事態をあらたに認識・判断したことによって感嘆の意味が生まれていると考えられる。つまり、連体形が感嘆的な表現を形成することに直接関わるのではないといえる。したがって、擬換述法の連体形は、単に準体句を形成するために機能しているものであるといえる。

③ 係り結びの連体形

係り結びの連体形は、これまで擬換述法の連体形を起源とするものと考えられることが多かったが、上記②の帰結によれば、擬換述法の連体形は、単に準体句を形成するためのものであるから、この点も再考を迫られることになる。係り結びにおける係助詞「ぞ」は、おおむね次のように焦点を示すか、あるいは焦点句を形成するものと考えられる。

- ・鳥の声などは聞こえて、御嶽精進にやあらん、ただ翁びたる声に額づくぞ聞こゆる。
(源氏・夕顔)
- ・思ひあがれる気色に、聞きおきたまへるむすめなれば、ゆかしくて、耳とどめたまへるに、この西面にぞ人のけはひする。
(源氏・帚木)

前者は、「ただ翁びたる声に額づく」ことが焦点に、後者は「この西面に人のけはひす」が焦点句になっている。

係り結びの連体形は、この焦点・焦点句の形成に関わるものと考えられる。現代語で類似する形式に「のだ」文がある。このうち、いわゆる「スコープのノダ」と呼ばれるものは、焦点を形成するものであるが、同時に文末に「の」という準体句を形成する形式をもっている。この「スコープのノダ」は、次のような文である。

- ・悲しいから泣いたんじゃないのよ。嬉しくて泣いたのよ。

これは、形の上では、「AはBだ」という名詞文の、AおよびBが名詞句になっているものである。つまり、次のような構造である。

- ・[泣いたの(A)]は[嬉しくて泣いたの(B)]だ。

なおかつ、この名詞文は指定文である。指定文とは、西山佑司によれば、「Aにあてはまるものは何か」といふと、それはBである」という意味構造をもつ。それはすなわち、Bを焦点としているということである。このような指定文の意味構造を利用して、上記の「のだ」文は焦点を形成しているのである。

このことは、古代語の係り結びでも同様と
考えられる。

- ・忍びやかに、心にきかぎりの女房四五人
さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふ
なりけり。このごろ、明け暮れ御覧ずる長
恨歌の御絵、亭子院の描かされたまひて、伊
勢貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、
唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせ
させたまふ。(源氏・桐壺)

という文は、[帝物語せさせたまふ(A)]は[た
だその筋をぞ、枕言にせさせたまふ(B)]のだ、
という構造である。この「ぞ」の直前に「女
房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせ
たまふなりけり」とある。この「帝が物語を
なさるのは」という内容を主題部とし、「も
っぱら和歌や漢詩についてなさる」という部
分を述部とする名詞文、それも指定文である。
このような構造をとることで、「ただその筋
を」を焦点化しているのである。つまり、係
り結びの連体形は準体句を形成するもので
あると考えられ、名詞句を形成して名詞文(指
定文)とし、焦点形成に関わっているのだと
考えられる。

(3)古代語連体形の変遷

以上のように見ると、擬換述法の連体形も
係り結びの連体形も、いずれも準体句形成機
能を果たしていると考えられた。したがって、
古代語連体形の機能は、連体修飾句形成機能
および準体句形成機能の二つであると考え
られる。

しかし、古代語連体形は、平安時代以降、
このうちの準体句形成機能を退化させ、同時
に終止機能を獲得しつつあった。格助詞「が」
「に」等の接続助詞化というのは、その一端
であると考えられる。また、このような準体
句形成機能がおこると、係り結び文は焦点形
成を果たせないということになる。つまり、
このような連体形の機能変化が、中世期に知
られる連体形終止の一般化と、係り結びの衰
退を引き起こしたのだと考えられる。

従来は、連体形終止の増加によって、係り
結びの表現効果がなくなり、係り結びが衰退
したとされてきた。連体形終止の増加を係り
結び衰退の原因と考えているわけであるが、
むしろ、連体形の機能変化、すなわち準体句
形成機能の退化が、連体形終止の一般化と係
り結びの衰退の原因と考えるべきであろう。

〈通説〉連体形終止の一般化



〈本論〉

準体句形成機能の退化

連体形終止の
一般化

係り結びの
衰退

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 大木一夫、認識する文、東北大学文学研
究科研究年報、査読無、第57号、1-27、
2008
- ② 大木一夫、古代日本語動詞基本形の時間
的意味、国語と国文学、査読有、86巻11
号、21-31、2009
- ③ 大木一夫、古代日本語動詞の活用体系—
古代日本語動詞形態論・試論一、東北大
学文学研究科研究年報、査読無、第59号、
1-36、2010

〔図書〕(計1件)

- ① 大木一夫、古代日本語連体形の機能とそ
の変遷—係り結び文・連体形終止文を視
座として—、科研費報告書、2010、136

6. 研究組織

(1)研究代表者

大木 一夫 (OKI KAZUO)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00250647

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：